

修士論文

補聴器が聞こえに与える影響について

手代木 裕美子

1. 研究背景

現在、国内には 1,994 万人の難聴者がいると推定されているが、そのうちのほぼ半数が自身の聴力低下に気づいていないとされている。また、近年のデジタル補聴器には様々な種類や価格帯があり、雑音抑制処理や指向性処理といった機能も搭載されているものがある。しかし、補聴器の機種や内部の音声処理により語音の明瞭性が改善されたとしても、補聴器装用者が必ずしも音の聞こえに満足して補聴器を使用しているとは限らない。また、多様な補聴器の種類や機能設定により音質も変化することから、補聴器適合の際にも装用者の好みという主観的評価が補聴器選択時に必要であると考えた。

2. 研究目的

本研究では、補聴器の種類や機能設定により音の聞きやすさという主観評価がどのように変化するのか、そして個人の音の好みをも考慮した補聴器の選択を容易にする一方法としての可能性について検討することを目的とし、擬似難聴者による主観評価を行った。

3. 研究結果と考察

その結果、内部処理が同一の補聴器であっても種類（形状）およびそれに伴うマイクロホンの位置により音質の評価に差があることがわかった。さらに、音質評価の結果から、音の快さ・美しさなど総合的な評価に関係する「快適・嗜好性因子」、音の鋭さ・透明感などに関係する「鮮明因子」、音の強さ・際立ちなどに関係する「金属性因子」の 3 因子が抽出された。これらの因子に含まれる評価用語対により補聴器の適合に主観評価を利用することが可能であると結論付けられた。しかし、これらは健聴者の結果であり、難聴者に好まれる音について改めて検討した上で、健聴者による音質評価との対応を検討すべきである。

ドクター・バーナード・ホームにおける財政史研究

飛田 圭吾

本論文は、19 世紀後半のイギリスにおいて設立された民間児童福祉団体ドクター・バーナード・ホームの財政状況の歴史的展開について研究することを目的としたものである。バーナード・ホームは設立から一世紀以上が経過する現在においても活動を継続している団体であるが、本論文の対象とした時期は、バーナード・ホームの創設者であるトーマス・ジョン・バーナードが存命中の時期とした。

研究方法は、主に一次資料であるバーナード・ホームが出版した年次報告書における会計報告をもとにして、バーナード・ホームの財政状況を整理・分析する方法を取り、財政状況と事業内容の分析を行い、財政状況の視点からバーナード・ホームの事業展開について明らかにした。

研究の結果、バーナード・ホームの事業は社会の人々による多くの寄付によって成立していた。バーナード・ホームは子どもたちのニーズに応じて、教育や施設への入所による支援をはじめとする様々な機能や事業を設立することで支援体制を整えたが、その事業展開を支えた寄付金の大半は、多くの一般市民からの善意によるものであった。またバーナード・ホームでは、寄付募集に関する運動等を実施することで、寄付やその他の収入を確保したが、それだけでなく社会に対して事業内容や貧しい子どもたちの現状をアピールすることによって、支援の必要性を伝え、資金を確保していた。資金確保の取り組みにより収入は増加傾向にあるが、事業を拡大するために銀行などから借入をすることで事業の運営を行っており、年度を経るごとに借入額の増加が顕著なものとなった。一時期においては借入金の返済期を設けるが、その時期においても事業の拡大は継続されており、財政状況に困難を抱えながらも、バーナード・ホームは一貫して事業の拡大を行っていた。